

アンティオキア教会から按手の祈りを受けて伝道旅行に送り出されたバルナバとパウロは、キプロス島において偽預言者の魔術師と対決します。そこで聖霊に導かれて勝利したパウロの働きを見て、地方総督が信仰に入りました。その後二人は、キプロス島から船でパンフィリア州に行き、そこからピシディア州のアンティオキアに行きます。パンフィリア州もピシディア州もどちらも現在のトルコになりますが、ピシディア州のアンティオキアの町は、バルナバとパウロが派遣の按手を受けたアンティオキアとは別の町になります。この当時、アレクサンドロス大王の死後、シリア王国の礎を築いたセレウコス1世が、自分の父親であるアンティオコスの名にちなんで町を建て上げたり町の名前を変えたりしたために、アンティオキアという地名は16ヶ所以上あるそうです。その中でもいちばん有名なのは、バルナバとパウロが送り出されたシリア州のアンティオキアになります。こうして、別のピシディア州のアンティオキアに入ったパウロとバルナバは、安息日にユダヤ教の会堂に入り礼拝を献げていました。するとその会堂長たちが二人に近づいてきて、会衆のために何か奨励をしてほしいと頼みました。そこでパウロは立ち上がり、会衆に向かって説教を始めます。それが16節以下に記されているパウロの最初の説教になります。パウロは、ダビデの子孫から救い主イエスがお生まれになるまでを、とても短く要約してわずか10節の間で語ります。そこには、エジプトの奴隷だったイスラエル民族を奴隷から解放して導き出してくださった神様が、預言者サムエルを立て、その後イスラエルの人々の求めに応じてサウル王を立て、やがてダビデ王を立てたこと。このダビデの子孫から救い主イエスが立てられたこと。そして、イエス様が来られる前に、バプテスマのヨハネが人々に悔い改めのバプテスマを宣べ伝えたことなどが語られています。そして、その説教の続きが、今日の聖書の箇所になります。

パウロは、ユダヤ教の会堂で説教をしました。まだ、ユダヤ教とキリスト教が明確に分かれていませんでしたので、パウロはかつて自分自身が熱心なユダヤ教の信者でキリスト者を迫害していた経験から、26節以下の言葉を語ります。「兄弟たち、アブラハムの子孫の方々、ならびにあなたがたの中にいて神を畏れる人たち、この救いの言葉はわたしたちに送られました。エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めず、また、安息日ごとに読まれる預言者の言葉を理解せず、イエスを罪に定めることによって、その言葉を実現させたのです。そして、死に当たる理由は何も見いだせなかったのに、イエスを死刑にするようにピラトに求めました」。パウロは語ります。この救いの言葉は、私たちに送られたのだ。私たちとは、そこにいたユダヤの人々、すなわちかつてのパウロのように、神に対する熱心な信仰のゆえにイエスをキリスト・救い主と認めない人たちのことを指しますが、同時にこの言葉は、聖書を読んでいる私たち一人一人に対しても語られているのです。「この救いの言葉はわたしたちに送られた」。そして27節は、少しわかりにくい話になっています。イエス様を救い主・キリストと認めず、したがって預言者の言葉を理解しなかったエルサレムの人々やその指導者たちは、イエス様を罪に定めることによってその救いの言葉を実現させたのだ、とパウロは語るのです。これはいったいどういうことでしょうか。イスラエルの人々にとって、救い主・メシアは偉大な王であるダビデのように軍事的・政治的力を用いて、イスラエルを強力な国家にして、ローマ帝国の属国から

解放する指導者を表していました。力の強い国家を統制する力の強いリーダーとしての救い主。まるで、今の時代に世界の各国が求めているリーダーのようですが、けれども、旧約聖書の預言では、救い主・メシアはそのような姿で預言されていたわけではありませんでした。預言書には、私たちの代わりに苦難を受けてくださるメシアの姿が描かれています。イザヤ書 53 章 3 節以下にはこのように記されています。旧約聖書の 1149 ページ、「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」。8 節には、こんなふうに記されています。「捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか、わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から絶たれたことを」。また 12 節には、こんなふうに記されています。「それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびたしい人を受ける。彼は自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった」。他にも詩編の中にもたくさん、メシアの苦難が語られています。このように、イエス様が罪に定められ十字架刑に処せられていくことは、旧約聖書の中ですでに預言されていたのです。そして、同じ使徒言行録 3 章にはペトロが行った説教が出てきますが、3 章 17 節以下でペトロも次のように語っています。新約聖書 218 ページになります。「ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。しかし、神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このように実現なさったのです。だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい」。

今日の聖書の箇所に戻りますと、パウロもこの説教の中で、すべては旧約聖書の預言者を通してすでに語られていることの成就なのだと、29 節以下で語ります。「こうして、イエスについて書かれていることがすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし、墓に葬りました。しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです」。何の罪も見いだせなかったイエス様を十字架にかけて殺してしまった。しかし、それはすべて、旧約聖書で預言されている神の御計画であった。もちろん、神様が最初からイエス様を十字架にかけのために用意されたのではなかったのですが、人々がイエス様を罪に定め、十字架につけて殺してしまった。そんなことは、神様はすでにご存じでおられた。けれども神様はその十字架を、人々の贖いの十字架としてくださった。十字架においてイエス様が私たちの罪を担ってくださったことは、先ほどのイザヤ書 53 章からも明らかなことです。そして神様は、さらにそのイエス様を陰府に捨て置かれず、よみがえらせてくださった。それが 34 節以下に記されています。「また、イエスを死者の中から復活させ、もはや朽ち果てることがないようになさったことについては、『わたしは、ダビデに約束した、聖なる、確かな祝福をあなたたちに与える』と言っておられます。ですから、ほかの個所にも、『あなたは、あなたの愛する者を、朽ち果てるままにしてはおかれない』とされている

ます」。ここでパウロが引用している言葉はいずれも旧約聖書の言葉で、最初の言葉はイザヤ書 55 章 3 節の引用で、後の言葉は詩編 16 編 10 節の引用になっています。パウロは、自身がユダヤ教の教師でもあったので旧約聖書によく通じていたのだと思いますが、かつてのパウロと同じように旧約聖書に熱心だったゆえにキリスト者を偽物と考えていたユダヤ教の人たちに対して、イエス様の出来事はすべて旧約聖書に預言されていた出来事なのだとパウロは語るのです。そして、さらに続けてこう語ります。36 節、「ダビデは、彼の時代に神の計画に仕えた後、眠りについて、祖先の列に加えられ、朽ち果てました。しかし、神が復活させたこの方は、朽ち果てることがなかったのです。だから、兄弟たち、知っていただきたい。この方による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、信じる者は皆、この方によって義とされるのです」。ここに、パウロの信仰義認論、人はただ信じることによってのみ義とされるという信仰についての本質が語られていきます。人間の無知のゆえにイエス・キリストを十字架にかけた。そのような人間の愚かしささえ、神は御自身の救いの御計画の中に入れてくださった。人が誰も思いつくことのできない神の御計画。従って、その神の御計画によって救いに預かるためには、人間がいくら努力をしても決して届くことはできない。人間にはどうてい思いつくことができないような方法で、十字架の贖いと復活という出来事において私たちに救いをもたらしてくださった神の御計画であるイエス・キリストの十字架と復活を信じる以外に、救いはないのだ。パウロはそう語るのです。

人の思いをはるかに超えたイエス・キリストの十字架と復活による救いの御計画。これが、神様が立てられた人類の救済計画でした。

この神の偉大な計画に関して、パウロはコリントの信徒への手紙一の 2 章 7 節以下で、次のように語っています。新約聖書 301 ページになります。「わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。しかし、このことは、『目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された』と書いてあるとおりです」。また、エフェソの信徒への手紙 3 章 7 節以下で、次のように語っています。新約聖書 355 ページ、「神は、その力を働かせてわたしに恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました。わたしは、この恵みにより、キリストの計り知れない富について、異邦人に福音を告げ知らせており、すべてのものをお造りになった神の内に世の初めから隠されていた秘められた計画が、どのように実現されるかを、すべての人々に解き明かしています。こうして、いろいろの働きをする神の知恵は、今や教会によって、天上の支配や権威に知らされるようになったのですが、これは、神がわたしたちの主キリスト・イエスによって実現された永遠の計画に沿うものです。わたしたちは主キリストに結ばれており、キリストに対する信仰により、確信をもって、大胆に神に近づくことができます」。

こうして、ユダヤ教の会堂で神の御計画であるイエス・キリストのことを大胆に語ったパウロとバルナバは、次の安息日にも語ってほしいと頼まれ、また集会が終わっても、多くのユダヤ人と神を崇める改宗者がついて来て、彼ら二人と語り合ったことが記されてい

ます。今日の聖書の箇所は、これでハッピーエンドのように終わっていますが、ところがその後の44節以下を見てみますと、ユダヤ人たちがパウロの説教に反対することが記されています。それでパウロは、46節以下でこう語っています。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい。わたしたちは異邦人の方に行く」。こうして、パウロとバルナバの異邦人伝道が始まっていくのです。

神の御計画。それは、心のかたくななユダヤ人には受け入れられませんでした。同じように、神の御計画は、私たちのまわりに人たちにもなかなか受け入れてもらえないのかもしれないかもしれません。イエス・キリストの十字架が私たちの救いである、などという神の御計画は、簡単に理解することができないからです。けれども信仰とは、理解することではなく、受け入れることなのです。私たちが救われたときを思い返してみると、神の御計画がすべて理解できたからではなく、それがよく分からなくても、それを信じ受け入れたからではなかったでしょうか。イエス・キリストの十字架と復活。この神の御計画は、理解することではなく、受け入れることが大切なのです。ただ信じて受け入れること。それ以外に救いはありません。そうであるなら、私たちの伝道も、相手に何とか分かってもらうというのではなく、分からなくても受け入れることを促していくことなのではないでしょうか。神の御計画への理解は、信じた後からおのずと付いてくるものなのです。それは、私たちがみんな、経験していることだと思います。神の御計画。それは、すべてを理解したから信じていることができるようなものではなく、まず信じ受け入れること。そうすれば、だんだんと神の御計画を理解することができるようになる。そんなものなのだと思います。ですから私たちも、無理やり相手を納得させるのではなく、自分もよく分からないのに受け入れてみたら生活が変わってしまったことを証ししながら、この人知ではどうも理解できない神の御計画を宣べ伝えていきたいと願います。

お祈りしましょう。